

校歌制定時の秘話①【創立 80 周年記念誌より】

校歌、ここぞ御幸 - 井上卓美先生 -

元教諭 岩田 武美

「校長先生がおよびです。ご気分がおわるいそうです。」

用務員さんがかけこんできて私にこう言った。私は校長室にとんでいった。先生は疲れた様子で「これを見てくれ。」と言われ手帳をさし出された。私はこの夜も理科室で実験や観察の仕事をしていた。

愛媛県立松山盲学校校歌は井上卓美先生が作詞され、先生の二男井上佳^{かい}先生が作曲された。それまでは盲啞学校であったが、分離して校名改称で、新たに校歌を制定しようと職員会にはかり、全員賛成でしかも作詞は校長先生ということになった。そして校歌制定委員会ができ、委員数人が選ばれた。数日して校長室で見せてくれた校歌は、古語がところどころにあって読みづらいので、校歌としてはどうかと言ったと思う。

それから十日くらいして校長室に呼ばれた。このときの校歌もむずかしいことばや古語があって、先生の頭の中にはこのようなことばがしみついているように思えたので、失礼ではあったが、もっと単純に素朴に考えてみたらどうであろうかと言ったりした。そして十日ぐらいしてよばれたときに、私も数日このことを考えていたので、かなりながながと意見を述べた。それは、小学部・中学部・高等部のそれぞれの、低年齢から高年齢への考慮。学習指導、生活指導の中での校歌であること、古語やむずかしいことばは遣わないこと。できれば口語にしたいこと。そして最も大切なことは、盲学校の特性を発揮することなど。私は盲学校に来てまだ三年目であったから、委員に選ばれることはないのに、作詞者の苦心も考えず、勝手なことばかりをしゃべった。

それから二十日くらいすぎた夜、用務員さんがかけつけてくれた。九時を過ぎていたと思う。先生は机の上に顔をうつぶせておられたが、私が入っていくと、顔をあげられて「どうもお前の言うようにはいかんわいや。この手帳の中から一つか二つを選んでみてくれんか。それでまた考える。」と言われて手帳を私の前にさし出された。私はその手帳を開いて驚いた。一ページから終りのページまで校歌、校歌である。それは、二十、三十もの校歌である。書いては消し、消しては書き、また消しては書き、どれもみな校歌であった。私は一枚一枚ページを見ていきながら、これは執念だ。戦争だ。すごい。私の無責任な勝手な批評がかえって先生の作意をこわしていることがわかって、手がふるえる感じで、深くおわびしなければならないのに、言葉が出ないでじりじりと油汗がにじむ。

先生は「どうかネ。あるかネ。」と言われた。しばらくしてまた、「どうだ・」と言われた。私はしばらくの間ものが言えなくて、ようやくのどから声が出たとき、手帳の中ほどのページを手で押さえて「これです。これです。」と言いつつ「佳さんに見せて下さい。」と言った。

私は先生の意志の強さにうたれた。この強い意志は先生のどこにひそんでいるのであろうか。おそらく歩いていても、すわっていても寝ていても、ただこのことばかりが念頭にあって、あれでもない、これでもないと書きつづけられ、苦心をされている。ひたすらに全力をかたむけた証言としてこの手帳がある。そして鍛接に耐えたことばとして強い意志を感じる。ここに愛がある。

先生は昭和三十四年八月三十一日をもって盲学校を最後に退職された。そのときの退任の挨拶の葉書が私の日記にある。

秋風が通りまことに清澄で皆様にも御快適のことと存じ上げます。小生事此度四十年目の歩みをふととどめ、盲児らと明月を讃むる日もなくて我が庭に帰りました。回想は熱く胸にみなぎり、長年月の御啓蒙の前に唯々感謝で一杯でございます。茲に謹んで御礼申し上げます。

不運の子らの上に、大いなる愛のみ手を祈りつつ、先ずは退任のご挨拶まで。

昭和三十四年九月

前愛媛県立松山盲学校長 井上 卓美

この葉書のあとがきに、先生はペン書きをして、

色々 ありがとう。

時々 遊びにきて下さい。

とある。

先生の盲学校教育への回想は、このように熱く胸にみなぎり、校歌となつては、「ここぞ御幸 ゆかりふかく ゆめゆたかに 光あふる」、そして「さだめおえど 越えん高嶺」と歌い、学校を去るに及んでは、「不運の子らに 大いなる愛のみ手を祈りつつ」と念じておられる。先生のあの手帳には「運命」と書いて、右側に「さだめ」と振り仮名がつけてあった。

先生は、昭和六十一年十月十五日亡くなられた。八十八歳。